

アマチュア宣教師ガスパラン夫人の奮闘

——『レヴァント紀行』（1848）——

畑 浩一郎

序

ガスパラン伯爵夫人。今ではほとんど忘れ去られてしまったスイス出身のこのプロテスタント作家について、今日何かを書くということの意味をどこに見いだせばよいであろう。当時としては長命の八十一歳という生涯の中で、彼女は実に八十冊以上もの著作を発表しているが、その中で、今日まで読み継がれている作品というのはほとんどない。いや生前ですら、ガスパラン夫人は、それほど世に認められた物書きとは言えなかった。「プロテスタントの精神に凝り固まった、お説教臭い貴婦人」というのが、おそらく彼女についての当時の一般的な見方であっただろう。サント＝ブーヴは、彼女の著作について「学ぶところも多いものの、絶えず私をいらいらさせる¹」と断定しているし、リメイラックは「ページごとに炸裂する厳格主義²」に辟易とすると告白している。彼女の名前は今では、文学史の本には毫も現れず、むしろプロテスタントの歴史に関する著作に短い記述が認められるぐらいである。この婦人についてわざわざ文字を費やすことは、したがって意味のあることには見えないかもしれない。

しかしガスパラン夫人の著作には、少なくともひとつ、真の注目に値する作品があるということをここで断言しておきたい。それは、彼女が1848年に出版した『レヴァント紀行』である。この作品は実際、十九世紀に数多く出版された一連のオリエン特旅行記群の中でも、一段抜き出ているように思える。軽快ながらも瑞々しいその文体、着眼点の独自さ、そして何よりも全編にあふれる独特のユーモアの感覚は、『レヴァント紀行』を今日でも十分読むに値するものとしている。専門家による評価と言う観点から言えば、この作品はこれまでのオリエン特旅行記に関する研究の中では、あまり論じられ

¹ Sainte-Beuve, « La Grèce en 1863 par M. A. Grenier », *Nouveaux Lundis*, Michel Lévy, t. V, 1872, p. 320.

² Paulin Limayrac, « Des Femmes moralistes, le *Mariage au Point de Vue chrétien* », *Revue des Deux Mondes*, 1^{er} octobre 1843, p. 68.

てはこなかった。しかし近年になって、何人かの研究者によってこの著作は掘り起こされ、それに正当な評価を与える試みが始まりつつある³。本稿執筆の目的の一つは、『レヴァント紀行』に関するこうした再評価の流れに乗りつつ、この作品が持つ魅力をできるだけ多くの人に伝えたいということにもある。

ガスパラン夫人の旅行記の面白さの一つに、彼女が旅行中に行なう現地人との交流があげられる。彼女は中近東の主流言語であるアラビア語については、全く初歩的な知識しか持ち合わせていない。それにもかかわらず、夫人は臆することなく、各地で次々と人々に話しかけていくのである。後述するように、彼女がこのような振る舞いをするのには理由がある。しかしそれを差し置いて考えたとしても、ガスパラン夫人が、旅先で現地人と築き上げる人間味あふれる関係は、当時のいかなる旅行者の著作にも見いだせない種類のものであり、『レヴァント紀行』の大きな魅力の一つとなっている。本稿では、こうした夫人と現地人との交流を検討することによって、異文化間のコミュニケーションのあり方という問題を考えていきたい。

ガスパラン夫人の葛藤

良きにせよ悪きにせよ、ガスパラン夫人は強烈なるプロテスタントの精神の持ち主である。彼女の著作からはいずれも、著者の熱烈なる信仰心が、まるで炎のように立ち上っている。同時代の批評家たちをうんざりさせたのも、また後世の研究者たちから黙殺されたのも、そのあまりに色濃い宗教色が原因のひとつとなっているのはほぼ間違いない。しかしこと『レヴァント紀行』に限って言えば、ガスパラン夫人のキリスト教への愛は、よい方向に働いている。というのも彼女の信仰心は、オリエントへの旅行を機会にして、ある特殊な行為へと彼女を駆り立てているのである。ガスパラン夫人が旅行中、現地の人々と様々な交流を持つことに成功するのは、実はこの行為のおかげである。それでは彼女が旅行中に取った行動とは、一体何だったのであろうか。

それは現地人、とりわけイスラム教徒に対する、キリスト教の布教活動である。熱烈なるプロテスタント信者であるガスパラン夫人は、自分がよきキ

³ 『レヴァント紀行』にまつわる先行研究については、拙論文「ハレムという悪弊 オリエント人女性の境遇に関するガスパラン夫人の考察」『仏語仏文学研究』第31号東京大学仏語仏文学研究会 2005年6月を参照。

リスト教徒であることだけに満足せず、その精神を他者にまで伝えようと努力するのである。

時あたかも、プロテスタントの「覚醒」の時代である。新教徒にとっての十九世紀は、旧教徒にとっての十七世紀、すなわちあの「聖者の世紀」と呼ばれた百年と同等であると言われる。ナント勅令廃止以降の受難はようやく終わり、今フランスならびにスイスの新教徒たちはあらゆる分野でその活動を活発にさせて行く。ガスパラン夫人は、夫であるガスパラン伯爵とともに、このプロテスタントの復権運動の急先鋒をつとめていた⁴。オリエントを旅することを決めた夫妻が、旅行を利用して、キリスト教の教えの伝播に励もうと考えたのはしたがって、ある意味で至極当然なことでもあったのである。

しかし一口にキリスト教を布教すると言っても、それは決して容易なことではない。第一にガスパラン夫妻は、本職の宣教師ではなかった。この時代、オスマン帝国の勢力圏には、西欧諸国から多数の有能な宣教師が派遣されていたことは指摘しておいてよいかもしれない。彼らの活動はしばしば宗教的な性格を逸脱し、政治的な色彩を帯びることにもなる。とりわけ、レバノンにおける西洋列強のしのぎ合いはよく知られている。ここではイギリス、フランス、ロシアの各宣教師が、母国からのふんだんな資金援助を得て、それぞれ英国国教、カトリック、東方正教の伝播に励んでいたのである。その目的は言うまでもなく、現地人を自国の宗派に改宗させることによって、東地中海の要衝の地に勢力圏を確立することにあつた⁵。ガスパラン夫妻の活動はしかし、このような生臭い動機とは全く無縁である。彼らはあくまでキリスト教の慈愛の精神から、一人でも多くの人間を神への愛へ導きたいという願いに突き動かされているのである。

しかし個人的な資格でキリスト教の教えを広めようとする夫妻には、本職の宣教師が持っているようなノウハウもなければ、資金もなく、また人脈もない。いくら彼らが熱意にあふれていたとしても、その試みはしたがって決して容易ではない。実際彼らは瞬く間に、いくつかの問題に直面することになる。

差し当たっては、言語の問題がある。同時代の他の西洋人旅行者と比べた場合、ガスパラン夫妻は確かに、現地語を比較的よく話すことができる。実

⁴ 妻のガスパラン夫人に負けず劣らず、過激なプロテスタントの精神の持ち主であるガスパラン伯爵の経歴に関しては、前掲の拙論文を参照。

⁵ Kamel Salibi, *Histoire du Liban du XVII^{me} siècle à nos jours*, traduite de l'anglais par Sylvie Besse, Naufal, 2^e éd., 1992, p. 108-109 を参照。

際彼らはしばしば、通訳の力を借りることなく、アラビア語で現地人とコミュニケーションを取っている。しかしだからと言って、キリスト教の教えを説くとなれば、話は別である。異教徒に対し、キリスト教の神がいかに偉大であるかを説得するためには、相当巧みに言葉を操る必要があり、それはガスパラン夫妻の能力を超えているのである。したがって彼らが取ることのできる手段は、間接的なものにとどまる。すなわち通訳に頼んで、彼らの代わりに現地の人々に説法を行なってもらおうか、あるいはスイスから大量に持参して来た、アラビア語で書かれた新約聖書や宗教書を、行く先々で配布することぐらいしかできないのである。

さらにオリエントでキリスト教について語る西洋人は、しばしば現地人の反感を招くことがある。ガスパラン夫妻はギリシアのペロポネソス半島を横断している時、通訳からある興味深い話を聞く。通訳が言うには、数年前、近郊のクサミラという小村に、アメリカ人の宣教師がやって来たと言う。宣教師はそこに学校を開き、近所の子供たちに読み書きや聖書を教えていた。子供たちはたちまち目覚ましい上達を遂げたが、それが村人たちの自尊心を傷つけることになる。村人たちは自問する。「我々から福音書を受け継いでいるあの外国人は、なぜ今になって我々にそれを説明しに来るのか⁶？」こうして学校は焼かれてしまう。宣教師は、村人たちを説得しようと努めるが無駄である。村人たちは、次のように言い張るのである。

「我々はあなた方に福音書を与えた。何の権利があって、あなた方はそれを私たちに持ってくるのか？」

「あなた方の家族の二十に十九は、福音書を持っていないし、それを読んでいないではありませんか。」

「大したことではない。」

「どうかせめて我々に、彼らが福音書を読める状態にさせてください。」(Ibid.)

この宣教師の願いを、村人たちは次のような言葉によって拒絶する。「お前たちは異端者だが、我々は正統派だ。お前たちは野蛮人だが、我々はギリシア人だ！」(Ibid.) ここで用いられている「野蛮人」(les Barbares)という語は古い用法で、「ギリシア人」(les Grecs)と対置される。かつて古代ギリシアでは、唯一ギリシア人のみが真の「文明人」であり、その他の「野蛮

⁶ Valérie Gasparin, comtesse de, *Voyage au Levant* (1848), 4^e éd., Lévy Frères, 1878, 2 vol., t. I, p. 69. 以下『レヴァント紀行』の引用は、1878年刊のこの第四版に拠り、引用箇所末尾に刊数とページ数を示す。

な」民族に知性の光をもたらす国民として考えられていた。西洋からやってくる宣教師はそれゆえ、クサミラの住人にとって、二重の意味でうさんくさい存在として映る。まずそれは、同じキリスト教徒でありながら自分たちとは異なる宗派に属する者であり、また何よりも、かつて自分たちの祖先、すなわち栄えあるギリシア人から文明を学んだ野蛮人の子孫でもあるのである。そのような人間から、何についてであれ教えを乞うなどということは、彼らには断じて受け入れられない。こうしてアメリカ人の宣教師の試みは失敗する。同じキリスト教徒であるギリシア人に対してさえ、福音書の教えを伝えることはこのように難しい。ましてや、異教徒であるイスラム教徒に対して、キリスト教の神への愛を語るなどということは、果たして可能なのであろうか。

ガスパラン夫妻の試みに対して障害となるのはしかし、このような外的な要因ばかりではない。彼らの最大の障害はむしろ彼らの内部、逆説的かもしれないが、彼らの信仰心の弱さから生じてくるのである。というのも彼らは、オリエントの人々を前にしてキリスト教の教えを語ることに、ある種の気恥ずかしさを覚えるのである。

ガスパラン夫人は、旅行記の冒頭からすでにこの「キリストの名前にまつわるある気後れ」(t. I, p. 10)について触れている。この気後れの原因は、自分たちが理解されないのではないかという不安にある。実際ガスパラン夫妻が旅先で出会う人間は、必ずしも彼らのように、常に宗教を身近に感じることのできる環境に生きているわけではない。それどころか、彼らはしばしば、宗教的精神とは全く無縁の、荒々しい世界に住んでいる。そのような人間に神への愛を語ったところで、所詮理解されないだろう。悪くすれば嘲弄されるかもしれない。ガスパラン夫人は、こうした内心の葛藤を、次のような言葉で語っている。

心の奥では絶えずひとつの声がこう繰り返します。「イエスの慈愛についておそらく何も知らない魂がここにひとつある。心をこめてこの魂に語り掛けなさい。」「そんなの奇妙かもしれないわ。」と意気地のない心が答えます。「理解してもらえるかしら。」こうして困惑して金縛りのようになってしまい、無理にでも言葉を発しようものなら、学術的な言葉しか出てこず、当然のごとく滑稽に聞こえてしまいます。どうしてこうなってしまうのでしょうか。ああ！それは、我が救い主も、その兄弟たちも愛していないからなのです。彼らのことよりもむしろ、自分のことを心配しているからなのです。まだキリストの中に生きておらず、キリストもまだ……私の中に生きていないからなのです。それは結局のところ、私自身の問題なのです。(Ibid)

神への信仰にかけては人後に落ちないと、自他共に認めるガスパラン夫人にしても、オリエント人にキリスト教の教えを伝えることは並大抵ではない。そこでは彼女自身の信仰の強さが試されることになるのである。

事実ガスパラン夫人は、旅行中、自分たちの試みの困難さを思い知らされるような具体的な経験をひとつしている。それは夫妻のオリエント旅行の中でも、最も過酷な一日のことであった。ペロポネソス半島を横断中の旅行者たちは、この日は早朝から、一日中馬に揺られ移動を続けている。すでに太陽が没してから数時間が経つが、未だ目的地は遠い。誰もが疲労の極限に達している。「ここまでつらい思いをし、乗っている馬の動くたびに苦痛を覚えるようになると、もはや感嘆する余裕などほとんど残っていません。何かを考える余裕さえ残っていないのです」(t. I, p. 133-134)と夫人は後に述懐している。疲弊しきった一行の願いは、早く宿屋に着いて、暖かい火の前で体を休めたいということだけである。ただその一心で、彼らはひたすら前に進む。

旅行者たちの希望はしかし無惨にも打ち砕かれる。ようやく宿屋に到着したものの、そこはすでに近くの沼に蛭を取りに来た人々で一杯となっているのである。ガスパラン夫妻はそれゆえ、馬小屋で一晩を明かさなければならぬ。不潔なわらの束の上に身を横たえ、夫妻は何とか眠りにつこうとする。しかし日中の疲れにも関わらず、なかなか寝入ることができない。馬小屋には、彼らの他にも客がおり、彼らが騒々しい音を立てているのである。野卑そのものと言ってよいこれらの客の様子は、ガスパラン夫人を怯えさせる。

彼らは歌い、叫んでいます。人間と馬とラバが、筆舌に尽くしがたい混乱を作り出しているのです。まるで巨大な倉庫のようで、そこに私たちの馬小屋が面しています。[中略]火が五つ六つ、そこに燃えています。明るい炎が、あたり一面車座になって並んでいる人間の顔を照らしています。そこにあるのは盗賊の面構えであり、もしフランソワ⁷の大きなナイフがなければ私はふるえていたことでしょう。黒人、白人、赤銅色の肌、獐猛な目つき、奇妙で野蛮な容貌。それら全てが赤い炎の照り返しを受けています。しきりに手足を動かし、奇妙な言語を話し、野蛮な笑い方で笑います。酒の入った水筒が回され、歌声は極端なまでに酔っぱらったものとなります。(t. I, p. 134)

西洋の貴族社会の心地よさに慣れ親しんだガスパラン夫妻にとって、この夜はまさに試練となる。彼らの目には、これらの泊まり客たちはもはや人間で

⁷ ペロポネソス半島横断の際、夫妻が雇った ドログマン 通訳。

はなく、一種の獣性を持って現れてくるのである。

あたりを見回すと、状況はますます悪い。夫妻の寝床とは一枚の布で仕切られただけの傍らに、蛭取りのもう一つの集団がやってきて、浴びるほど蒸留酒を飲んでいる。頭上に目を向ければ、天井の梁に男が乗っており、指で調子外れのリズムをとりながら、つんざくような大声で歌っている。ガスパラン夫人は、生まれ育った文明社会からあまりにも遠くにいることを感じ、深い孤独を感じる。「正直に言うと、これらの人々の間にいると、自分がひとりぼっちでいる気がします。〔中略〕もしこれほど疲れていなければ、恐ろしく思ったことでしょう。」 (t. I, p. 135)

しかしガスパラン夫人は、この瞬間自分の使命を思い出す。彼女は自問する。自分がキリスト教の教えを説かなければならないのは、まさにこのような野蛮な人間に対してではないだろうか。彼らをこうした無知で罪深い状態から抜け出させ、福音書の教えによって正しい道につかせることこそ、彼女の使命なのではないだろうか。しかしそのような行為はまた同時に、夫人を震え上がらせる。一体どうやって、野獣のようなこれらの男たちに話しかけることなどできょう。ガスパラン夫人は、臆病と使命感の間で板挟みになる。

しかしそれは私たちの兄弟なのです。彼らも、神の子が探しに来られた魂を持っているのです。ああ！主よ。彼らにあなたの愛を語る何らかのメッセージを送ってください。もし私たちが彼らにそれを語るができなくても、少なくとも彼らのために祈る力を私たちにください。(Ibid.)

結局この時ガスパラン夫人は、宿屋の泊まり客に対してキリスト教の福音を説くことはできずに終わる。オリエント旅行は、スイス出身の裕福な貴族に対し、これまで見たこともないような種類の人間と邂逅させる機会となる。こうした人間が見せる動物的獐猛さは、ガスパラン夫妻の勇気をしばしばくじくことになるのである。

バクシーシ 聖書と心付け

キリスト教の教えを異教徒に広めようという理想に燃えてスイスを旅立ったガスパラン夫妻ではあるが、その試みは想像よりはるかに困難なものだということが分かる。言語の問題、現地人の不信の問題に加えて、彼ら自身の気の弱さという問題が、大きく彼らの前に立ちはだかるのである。しかしこのまま引き下がるのでは、プロテスタント復権運動の騎手ガスパラン夫妻の

名が泣く。何としても困難を乗り越え、オリエントの人々に福音書の教えを伝えなければならない。ガスパラン夫妻は、実際に行動に移る決意を固める。

夫妻が最も精力的に布教活動を行ったのは、ナイル川遡行の旅の途上である。後に述べるように彼らは、この時代の多くの西洋人旅行者と同様、カイロからヌビアにある第二瀑布まで、往復二ヶ月に渡る船旅を行なっている。その途中、夫妻はしばしば船を停め、そこで出会う現地人にキリスト教の本を配るのである。

こうしてガスパラン夫妻は内心の葛藤を乗り越え、思いきってキリスト教の布教活動を始めてみる。すると彼らの心配は実は、単なる杞憂に過ぎなかったということがすぐさま分かる。オリエントの人々は、諸手を挙げて、異教の教えを伝えに来たこの奇妙な西洋人旅行者を迎え入れてくれるのである。

例えば高エジプトのミネアという村での出来事が、そのよい例である。ガスパラン夫妻はここで、一軒のアラブ人の家を写生するため、船を止める。すると物見高い現地人たちがやって来て、瞬く間に彼らを取り囲んでしまう。その中の一人のアラブ人に、ガスパラン伯爵は試しに本を一冊贈ってみる。するとこのイスラム教徒は、それを受け取ってくれる。この成功に気を良くした伯爵は、小舟へと取って返し、さらに多くのアラビア語で書かれた聖書や宗教書を持って来る。大騒ぎの始まりである。

「言っておきますが、これらはキリスト教の本ですよ。」

「ください、とにかくください！」

手が何本も伸びてきます。コプト人⁸がやってきて、「クリステヤン！クリステヤン！」と叫びます。コプト人は皆、読むことができます。コプト人には福音書を、ムスリムには宗教書を。どちらもアラビア語で書かれています。私の夫は五回も小舟まで行き、五回とも空手で戻ることになります。(t. I, p. 259-260)

キリスト教の本の配布は、このように素晴らしい成果をあげることになる。その成功はあまりに華々しく、逆に旅行者たちを心配させるほどである。というのも、このペースで本の配布を続ければ、彼らがこれから各地で配る本のストックを、全てここで使い果たしてしまうかもしれないのである。彼らはやむなく配布を打ち切ろうとする。しかしそれはたやすいことではない。

「マ、ライッシュ、マ、ライッシュ！（もうありませんよ）」それでも、彼ら

⁸ エジプト、またはエチオピア出身のキリスト教徒。

は私たちをせき立てて、私たちをお願いします。〔中略〕私たちはダービエ⁹に避難します。旅行の間中配布を行なわなければならない本のストックが、一時間で底をついてしまいかねないからです。彼らは私たちを追ってきます。じゃああと二冊、三冊だけ。これでもうおしまい。(t. I, p. 260)

しかしそれでもまだおしまいにはならない。なぜなら次のような言葉が旅行者の耳を打つのである。「『だんな、黒人が一人いますぜ。』『黒人だって!』夫の心はもう我慢できません。『黒人に本を!』」(Ibid.) こうして旅行者たちの本のストックは、さらに減っていくことになる。

旅行者の心配に反して、本の配布はこのように予想以上にうまく行く。オリエント人は自ら進んで旅行者たちに本をもらいに來るのである。しかし果たしてそれで本当に、キリスト教の教えはオリエント人の心に伝わっているのだろうか。旅行者たちは考え込む。オリエント人たちは、彼らが本を配っている意図、すなわちそれを通して福音書の教えを学んで欲しいという意図を理解しているのだろうか。それはいささか疑わしい。むしろそれは、単なる贈り物としてしか捉えられていないようである。

こうしてガスパラン夫妻は作戦の練り直しを迫られる。ただ聖書や宗教書を闇雲に現地人に配るだけでは意味がない。それらの本は読まれることもなく、いずれは打ち捨てられてしまうであろう。それではどうすればよいのか。旅行者たちは熟考し、本の配布に一つの基準をもうけることにする。すなわち今後本を配る時は、まず相手が字を読めるかどうかを確かめてから行なうことにするのである。言うまでもなく、与えられた本から福音書の教えを学ぶためには、当然まずそれを読むことができなければならないからである。

ある時、ガスパラン夫妻は一軒の建物の前を通りかかる。建物の門の前には、トルコ人の役人が、秘書と思われるコプト人、すなわちエジプト出身のキリスト教徒を連れて座っている。彼らは早速、夫妻の標的となる。

夫が、コプト人に字を読めるかと尋ねます。彼はただ字を読めるだけではなく、カイロの宣教師リーダー氏の学院の卒業生でした。私たちは彼に何冊かの本を渡します。役人がそのうちの一冊を手に取り、二、三ページばらばらと目を通し、コプト人に返します。このウラマー(宗教的指導者)は、その本は売り物なのかと尋ねます。「いいえ、差し上げるのです。それも喜んで!」ウラマ

⁹ 原綴りは、「Dabieh」。後述のように、ナイル川独自の「小舟」を指す。画家レオン・ベリー(1817-1877)の代表作『ダービエを引く農民』(1864年のサロン)の表題でも知られる。

一は手を額にやり、一冊本を取ります。陽気な感じの太った男です。(t. II, p. 4)

ここではガスバラン夫妻の目的は、ついに達成されたかのように見える。字を読むことができるコプト人は、彼らを与えた本を通じて、キリスト教の教えについてさらに理解を深めることができるだろう。しかも今回は、このコプト人の他に、トルコ人のウラマーにも本を与えることができた。このイスラム教徒はもしかすると、彼らを与えた本のおかげで、キリスト教の神への愛に目覚めるかもしれない。夫妻の布教活動もついに実を結び始めたのだろうか。そう彼らが期待した瞬間、全ては再び滑稽な結末に陥ってしまう。彼らの姿を目にした現地人たちが、次々と集まって来るのである。

やがて岸辺は黒い長衣を着て、黒いターバンをまとった人々に覆い尽くされます。「本だ、本だ！」コプト人たちは、イスラム教徒に本を渡そうとする夫の手を払いのけます。「モスLEM！モスLEM！」と彼らは憤慨して叫びます。「いや！まさにそのためなんだよ！」本を欲しがるモスLEMは、それを受け取ります。私たちは、新約聖書を含めた様々な著作を、三十冊以上も配るのです。(Ibid.)

再び本を求める群衆の殺到である。しかも皮肉なことには、同じ宗教を信仰するコプト人が、キリスト教を布教しようとするガスバラン夫妻の行為を妨害するのである。彼らの目には、この西洋人たちは、自分たち同宗の徒をないがしろにしつつ、異教徒にだけ贈り物を配っているように見えるのである。

しかし今回は、ガスバラン夫妻の活動は無意味ではないはずである。なぜなら、ただ闇雲に本を配布していた前回とは異なり、今回は字が読める人間にのみ限定して本を与えているはずだからである。こうして布教活動の意味を何とか保とうと努力する旅行者たちの意図はしかし、またもや裏切られてしまう。なぜなら、相手が本を読めるかどうかを決定する役目は、実は彼らの雇ったヌビア人の水夫の一人によって引き受けられているのである。

獐猛な鹿¹⁰は、君主のような寛容さで、本の配布を取り仕切っています。彼は、誰が読むことができ、誰ができないかを決め、無知な人間は拳闘で追い払うのです。言っておきますが、彼自身は、文字とオペリスクの区別もできないことでしょう。(Ibid.)

¹⁰ ガスバラン夫妻は、自分たちの雇ったヌビア人の水夫の何人かにあだ名を付けている。「Tigre-féroce」と呼ばれるこの水夫も、そのうちの一人である。

こうしてガスパラン夫妻の試みは、再び意味のないものになってしまう。どのように努力しても、彼らが配布する本は単なる贈り物、現地の言葉を借りれば、一種の「バクシーシ」以上のものにはなりえないかのである。

オリエント人がこのようにガスパラン夫妻に物をねだりにやって来るのは、何も彼らだけの責任ではない。当時この地を訪れる西洋人旅行者があまりに簡単に彼らに心付けを与えるため、彼らは安易な考えに慣れきってしまったのである。実際、ガスパラン夫妻は、ナイル川流域の各地で、「カワージヤ、バクシーシ！（だんな、心付けを！）」という言葉につきまとわれる。施しをするために貧しい人間がいないかと尋ねる夫妻は、ある時、次のような答えを受けている。「マ フィッシユ、マ フィッシユ！バクシーシ、バクシーシ！（いないよ、いないよ！贈り物、贈り物！）」(t. I, p. 335) 彼らが欲しがるのは、とにかく心付けなのである。

しかしここで言うっておかねばならないのは、オリエント人たちはただむやみに旅行者に贈り物をねだるだけではないということである。公正さの精神からか、彼らはしばしば、物を受け取ったときには、旅行者にお返しをくれるのである。確かにそれは時として、西洋人を脅えさす品々ではある。ガスパラン夫人は、ある日の本の配布の光景を次のように描写している。

私たちが福音書の最初の部を手渡したコプト人は、胸元から小麦粉菓子を取り出します。注意深く上着とシャツの間に隠しておいたのです。彼は私にそれくれます。何てこと！ちょっとでもそれをかじらなければなりません。

(t. I, p. 260)

オリエントの人々と良好な関係を保つことはなかなか難しい。本を進呈したコプト人は、お礼に、衛生面から見ればぞっとしないような小麦粉菓子のかけらをくれるのである。ガスパラン夫人は、このコプト人の親切心を損ねないよう、小麦粉菓子を必死に飲み込むことになる。

このように現地の人々は、しばしば旅行者に対して、いかにもオリエント人らしい無邪気な寛大さを見せてくれるのだが、この美德は現在この地を訪れる西洋人旅行者との頻繁な交流によって破壊されつつある。西洋人とのやり取りを通して、オリエント人はしばしば、ある種の「打算」を覚えるからである。その結果、時として思いもかけない事態が生じることもある。ガスパラン夫人は次のように書いている。

大変名誉なことに、彼らは私たちにいくつかの贈り物^{フアダー}を受け取らせませす。槍や、

ヌビアの盾（丸い鉄製の枠に皮が張られている）、幅広で真っ直ぐな剣、さらには私たちの眼前の地面で拾った石までくれるのです。私が思うに、ヌビア人たちはツーリストの愚行について何か誤解しており、その誤解は現実をも凌駕しているのです。（t. I, p. 335）

ヌビア人たちは、西洋人がまだ何も与えないうちから、進んで西洋人の喜びそうなものを提供しにやってくる。その原因は、この地を訪れる西洋人旅行者がしばしば、現地の特産品を大量にお土産に買い上げていくからであり、こうした旅行者の姿を目にするヌビア人は、自分たちの日常品を提供しさえすれば、お金がもらえるのだと勘違いしてしまうのである。いずれにせよ、このような欲得の考えが渦巻く状況では、聖書を現地民に配ることによって福音書の精神を説くなどとしても無駄である。彼らはすぐさまそれを贈り物の一つと考えてしまうであろう。

しかし希望が全くないわけではない。中には打算を見せずに、旅行者と個人的な友情関係を築くことのできる現地人もいる。ナイル川のほとりでガスパラン夫妻が出会うあるアラブ人がその一例である。夫人はこのときの出会いを次のように語っている。

私たちは、ロバに乗った一人のアラブ人を追いつきます。彼は人の集団に出会うたびに立ち止まり、こちらの人々とは笑い合い、あちらの人々とはおしゃべりをします。そして当然のごとく、私たちに二十もの質問を浴びせかけますが、私たちが黙っていてもがっかりすることはありません。（t. I, p. 242）

このアラブ人は、最初からコミュニケーション可能な人間として現れてきている。これまで夫妻が出会ったオリエント人は、いずれも多かれ少なかれ受動的であり、夫妻の語りかけに答えるという形の対話しか取ることがなかった。ところがこの男は、旅行者が語りかけるよりも先に彼らに語りかけ、さらに彼らを圧倒するほど会話を繰り広げるのである。この男とならば、キリスト教の神について語り合うことができるかもしれない。旅行者の期待は、男が脇に大きな帳簿を抱えているのを見ますます高まる。疑いなく、彼は読み書きができるのである。

ガスパラン伯爵は彼にアラビア語で書かれた宗教書を手渡す。男は本を開き、書いてある内容を、まるで歌でも歌うかのように声を上げて朗読し始める。旅行者たちは大いに喜ぶ。この男なら彼らの渡す本を捨てずに読んでくれるだろう。しかしここで旅行者たちは思わぬ問題にぶつかることになる。というのも夫妻は、どうしても彼にその本は贈り物だということを理解させ

ることができないのである。業を煮やした夫人は、「ローマ人のやり方」を用いることにする。つまり身振りに訴えかけるのである。それによってようやく夫人は、自分の意図を伝えることに成功する。

私は本を取り上げ、もったいぶって彼の手の中に戻します。今度は彼は受け取りました。それから、感謝、お礼の猛攻撃です。彼は自分のロバから下りて、何としても私をそれに乗せようとします。私たちは非常に骨を折って、自分たちは自らの楽しみのために歩いているのだと彼に説明をします。それは、この国の怠け者たちにとってはなかなか理解しがたい、奇妙な考え方なのです。

(t. I, p. 242)

西洋人を見るとすぐに心付けをねだりに来る他のオリエント人とは、彼は何と異なることか。明らかにこの男は、旅行者がこれまでに出会った現地人とは範疇を異にしているのである。

こうしてアラブ人と旅行者たちの間にはある種の親愛関係が生まれる。両者の間では会話がはずむ。とは言え、この会話は、あまり均衡がとれているとは言いがたい。と言うのも、アラブ人の方が、西洋人二人よりもはるかに活発に話すからである。いずれにせよ、この会話を通じて、夫妻は自分たちが結婚しているということを伝える。お返しにアラブ人は自分の宗教を教えてくれる。

「ムスリム（イスラム教徒）、ラー！ラー！（ちがう！ちがう！）」彼は自分の胸を指して言います。「クリスチャン！クリスチャン！」(t. I, p. 243)

旅行者たちの試みは、実はまたしても無意味だったのである。彼らがイスラム教徒だと思い込んでいたこのアラブ人は、実は旅行者たちと同じキリスト教徒だったのである。

しかしたとえキリスト教の布教はうまく行かなかったにしても、ガスパラン夫妻とこのアラブ人が友情で結ばれることには変わりない。彼らは仲良くともに道を歩み、アラブ人が住んでいる村までやって来る。アラブ人は何としても旅行者を自分の家に招待すると言い張る。旅行者はしかし先を急ぐため、それを固辞する。こうして彼らは互いに別れを告げる。しかし夫妻が小舟まで戻ってみると、驚いたことに、このアラブ人がまた岸辺に立っているのである。彼はしかもナツメヤシを腕いっぱい抱えている。

彼はそれを無理矢理、私たちに受け取らせませす。私たちの方は、彼に一冊の新

約聖書を贈り、彼はそれをうやうやしく受け取ります。またタバコの蓄えも進呈すると、今度は喜んでそれを受け入れます。そして情愛に満ちた挨拶を交わしながら、我々は別れるのです。(Ibid.)

当時のオリエント旅行記において、西洋人旅行者が、現地人とこのような人間的な友好関係を築く場面というのはむしろ稀である。ガスパラン夫妻は、現地人に対していささかの軽蔑心も抱くことなく、同じ人間として対等に付き合おうとしているように見える。常に一貫した、旅行者の現地人に対するこうした友好的な眼差しは、『レヴァント紀行』の大きな特徴のひとつとなっている。

しかし他方で、旅行者たちが自らに課したキリスト教の布教という面から見れば、彼らの試みは成功しているとはとても言いがたい。彼らは確かに聖書を配布することはできるが、必ずしもそれで、キリスト教の精神まで配布できているわけではないのである。それゆえ今一度、作戦を練り直す必要がある。本の配布のような間接的なやり方では、らちがあかない。やはりいくら困難であっても、彼らの口から直接オリエント人にキリスト教の神への愛を説くにしくはないのである。かくしてガスパラン夫妻は、この新たな方法をまず手近なところから試すことにする。その対象となるのは、彼らがナイル川航行のために雇った十二人のヌビア人の水夫たちである。

ガスパラン夫妻とヌビア人の水夫たち

前述したように、ガスパラン夫妻は、カイロの河港ブーラクから、ヌビアにある第二瀑布まで、往復二ヶ月に渡るナイル川上の船旅をしている。距離にして片道およそ千キロメートル、北回帰線をも超える大旅行である。しかし当時、少なからぬ西洋人旅行者がそれを行なっている。ガスパラン夫妻に遅れること二年、フロベールとデュ・カンがまさに同じ航路を取ることになるだろう。言うなれば、この船旅は、当時エジプトを訪れる西洋人にとって、あこがれの旅の行程のひとつであったのである。

ガスパラン夫妻は、この船旅のため、「ダービア」と呼ばれるナイル川特有の、極端に前後に長い小舟を、水夫つきで借り入れている。狭いながらも船の内部はいくつかの小部屋に仕切られており、それらはそれぞれ台所、客間、書庫、食堂、寝室などに利用することができる。そこに夫妻はいくつかの家具調度品を持ち込み、船を快適な「浮く家」に改造する。ガスパラン伯爵によって *Véloce*、すなわち「敏捷号」と名付けられたこの船は、船長ハサニ

ンに率いられた十二人のヌビア人の船乗りには操られながら、ある時は櫂によって、ある時は帆によって、またある時は引き綱によって、船の名前とは裏腹な、ゆっくりとした速度でナイル川を進むことになる。「二十四時間ごとに三里進みます。すてきなことです」(t. I, p. 247)と夫人は皮肉っている。

船旅の途中、旅行者たちは、基本的に外界との交流から閉ざされる。時折上陸する際に出会う現地の人々を除けば、彼らが日常的に接するのは、彼らが雇い入れた水夫たちだけである。旅行者と船乗りたちは、広いとはいえない船の上で、二ヶ月間にわたって共同生活を送ることになる。彼らは寝食を共にし、危険な経験をもしばしば共有している。夫妻が福音書の教えを伝えようとするのは、彼らとまるで家族のような付き合いをするこれらの水夫たちに対してなのである。

水夫たちは皆アスワンから来たイスラム教徒である。彼らは、ヌビアの出であることを誇りにし、自分たちはアラブ人の農民^{フアラ}とは違うといつも言っている。しかしガスパラン夫人の見たところ、これらの水夫たちも、アラブ人と同様、様々なイスラム教徒特有の欠点を持っているように思われる。例えば、彼らは頻繁に神の名を口にするが、プロテスタントの旅行者にしてみれば、それはあまりよい習慣ではない。

私たちのヌビア人たちは、あらゆるイスラム教徒と同様、むやみに神について語ります。「アッラーによって」、「アッラーの名において」、「アッラーの祝福と共に」というのが、常に繰り返される決まり文句です。見かけだけを考えれば、この民族は地上でもっとも信心深い民族だと考えてしまうかもしれません。

(t. I, p. 238)

しかし、とガスパラン夫人は注意を促す。彼らの宗教心は、実は見せかけに過ぎないのである。嘆かわしいことに、この「アッラー」という語は、フランスにおける「神^{ディエュー}」と同様、全く宗教的な意味を欠いて発音されている。フランス人が会話の端々に「神よ！」という言葉を含み込んだとしても、それは必ずしも彼らが敬虔であるからではない。逆に、聖なる言葉を頻繁に用いることは、それを軽んじていることに他ならない。この点で、ヌビア人も、フランス人と同様、全く敬虔ではないのである。

そもそもイスラム教徒であると自称するこれらの水夫たちは、本当に信仰を持っているのであろうか。旅行者たちはこの点にすら疑いを抱く。というのも彼らは、ナイル川の上での旅の間、ただ一人の水夫もひざまずいて祈っているのを見たことがないのである。ガスパラン夫人は、彼らの宗教的態度

を激しく批判する。「彼らは嘘つきの預言者を崇拜しているのです。いやむしろ彼らは何も崇拜してはいないのです。」(t. I, p. 236)

さらに嘆かわしいことには、これらの水夫たちは、自分たち自身が強い信仰心を持っているわけではないのにも関わらず、異教徒に対しては軽蔑心をあらわにする。水夫たちは、船の上で旅行者たちを眺めながら、「キリスト教徒の犬め」という内容の歌を歌っている。(t. I, p. 335-336) また性格に関しても、全く信用がおけない。とりわけ嘘をつくことは、彼らの共通の欠点である。

まるで血液のように、欺瞞がこの民族の血管を流れています。私たちの水夫たちも同様で、彼らは大まかな話でも嘘をつくし、細かい話でも嘘をつきます。また同様に盗みも働きます。彼らの唇からは、真実よりも早く嘘が出てきます。船長はと言えば、ロシュドラゴン公爵夫人と旅をしたことがないのにもかかわらず、私たちを引きつけるために、この夫人のお墨付きをどこからか手に入れてきました。最も下っ端の水夫にいたるまで、「いいえ」と言うべき時に「はい」と言い、「はい」と言うべき時に「いいえ」と言います。後で嘘がばれたとしても、当惑した素振りも見せません！(t. I, p. 387)

ガスパラン夫人によれば、水夫たちにこのような欠点があるのは、彼らの信仰のあり方が誤っているからに他ならない。もし彼らがキリスト教の神を信じていれば、このような恥ずべき状況にはいないであろう。それゆえ何としても彼らに真の神への愛を吹き込まなくてはならない。ガスパラン夫人はこうして自らの決意を新たにす。

しかし夫人は同時にまた、自分たちの行為に一つの制約を設けるのを忘れない。それは、水夫たちに福音書の教えを伝えるにしても、決して無理強いしてはならない、ということである。彼らと水夫たちは、旅行中いわば主従の関係にある。それを考慮しないで、水夫たちにキリスト教の教えを押しつけたのでは、彼らはそれを自分たちの信仰の問題ではなく、主人の命令と解釈してしまうかもしれないのである。それでは旅行者たちの目的は達せられたことにはならない。あくまで水夫を心から納得させた上で、キリスト教に改宗させなければならぬのである。こうした旅行者たちのきまじめで、誠実な態度は、次のエピソードによっても明らかになるだろう。

敬虔なプロテスタントの旅行者たちは、たとえ灼熱の太陽が照りつける高エジプトだろうが、クロコダイルが跋扈するヌビアであろうが、彼らの神が命じた一週間の規律を守ることを忘れない。したがって毎日曜日には、旅行者たちは安息日の掟に従い、水夫に仕事をさせず、小舟は岸につないだまま

にしておく。しかし旅程を急がせたいガスパラン夫婦にとって、この掟の遵守は、必ずしも好ましいものではない。ある日曜日、夫人は自分たちの抱えるジレンマについて、次のように記している。「規律に背きたいというこの内にこもった欲望が、全員の心の中でつぶやき声を上げます。水夫を今日も働かせておくために、私たちは無数の理由を考えつきます。しかし禁止は禁止なのです。」(t. I, p. 234-235) ではやむを得ない。先を急ぎたいのは山々だが、休むしかないのである。

しかしここでまた新たな問題が、まじめな、おそらくまじめすぎる旅行者たちを悩ませる。というのも、キリスト教徒である旅行者たちが、日曜日に休むのは、その信仰が命じるのだから問題は無い。しかしその習慣を異教徒である水夫たちにまで押し付けてよいのだろうか。いくら契約による主従関係にあるとは言え、キリスト教の習慣をイスラム教徒に強制させるのは、権力の濫用になるのではないか。このような疑問に悩むガスパラン夫人は、聖書を繙くことでこの問題に解決を与えることになる。そこには次のように書いてあるのである。「この日はいかなる仕事も行ってはならない。汝も、汝の妻も。そして汝の家にいる外国人も。」(t. I, p. 235) 彼らが雇い入れたスビア人たちは、まさに彼らの家にいる外国人であると言えないだろうか。したがって彼らを日曜日に働かせなくても、特に問題は無さそうである。これで旅行者はまたひとつ良心の呵責の荷を降ろすことができた。

ガスパラン夫人は水夫たちに、キリスト教の神への愛を伝えようとする。しかし彼女はすぐさま障壁にぶつかることになる。またしても彼女は、異教徒に向かってキリスト教の教えを語ることの気恥ずかしさに取り付かれてしまうのである。今度はしかし夫人の不安も根拠がないわけではない。なぜなら水夫たちは二ヶ月間に渡って、常に旅行者と行動を共にするのであり、もし彼らの気分を害してしまえば、旅行者たちの旅も快適なものではなくなってしまふのである。こうして彼女は、願いと気弱さの間で逡巡する。しかしある夜、夫人はひとつの神秘的な経験をし、そのことによって最終的な決意を固めることになる。

この晩、夜の祈りを済ませた夫人は、ふとあたりの様子に注意を向けてみる。静かな夜である。月は明るく星は輝いている。水夫たちは皆、毛布にくるまって甲板に横たわっている。十時になると、静寂の中、ダルブーカ(エジプトの太鼓)のくぐもった単調な音が鳴り響き始め、しばらくするとアラビア語のメランコリックな歌が聞こえてくる。見張りの水夫二人が歌っているのである。静かな川面の上を彼らの歌の調べが流れていく。この瞬間、夫

人は強い感動に襲われる。「まるで子供のように純真な心を持ったこれらのヌビア人に何とかして、キリスト教の神の愛を教えてあげたい。」夫人は強くそう願う。

この哀れな人々の魂についての考えが、私の心を強くつかみました。彼らがこれほどまで単純で、これほどまで純情であるのを見ると、彼らの魂、そう彼らの魂を私が心から愛していることを感じるのです。—— 人の魂！永遠の魂！しかし唯一なる救い主よ、彼らはあなたのことを知らないのです。(t. I, p. 236)

しかし同時にまた夫人は、激しい気後れにもとらえられる。水夫たちにキリスト教の教えを伝えることは、彼女にはどうしても不可能なことに思えてしまうのである。「どうして、主よ、あなたのことを知っている私が、彼らに話しかけないのでしょうか。どうして私はいつも自分の不信心に直面しなければならないのでしょうか。」(Ibid.) 自分の信仰の弱さに嫌気のさした夫人は、自責の念から、神に向かって八つ当たりをするまでになる。

—— 神よ！どうすればよいのです。もし私が何もできないのであれば、あなたが彼らに福音を教えてください。あなたが彼らを救ってください。それは人間には無理です。しかしわが神よ、あなたなら！あなたは私たちの心に触れなかったのでしょうか。彼らを改宗させるのは、それよりも難しいことでしょうか。我々人間は全て同じ泥からできているのではないのでしょうか。我々には到底語ることはできません。あなたが語ってください！私たちは失敗するのがこわいのです。なぜなら自分を気にするからです。あなたはあなた自身しか気にかけなくてもよいのだから、あなたが行動してください！(Ibid.)

ガスパラン夫人はこのような考えに一晩中悩まされる。しかし最終的に次のような考えが彼女を決断させる。すなわち、最後の審判の日に、これらのヌビア人は旅行者の元へ来て、旅行者が真実を知っていながら、彼らにそれを伝えなかったことを嘆くことになるのではないか。そのような取り返しのつかない事態になるよりは、むしろ今勇気を振り絞り、彼らに語りかけたほうがいいのではないか。こう考える彼女は、短からぬ葛藤の末、水夫たちにキリスト教の教えを説くことを決意するのである。

アマチュア宣教師の奮闘

ガスパラン夫妻は、彼らの試みに関して通訳のアントニオに意見を求めて

みる。するとアントニオは次のように警告する。キリストの名前やその教えについて少しでもほめかしたりするだけで、水夫たちは大いに憤慨するだろう、と。夫妻は考え込んでしまう。一体どのようにしてキリストの名を出すこと無く、父であり裁き手である神について話すことができるだろうか。熟考の末、結局彼らは、自分たちが持参して来た宗教書を利用することにする。しかし言うまでもなく、それを水夫たちに渡すのではない。本を配るだけでは、キリスト教の精神が伝わらないのはすでに了解済みである。旅行者たちが考えるのは、本に書いてある逸話を、通訳のアントニオを通して、水夫たちに翻訳して聞かせるのである。そうすれば彼らを苛立たせること無く、キリスト教の教えに水夫たちを近づけることができるかもしれない。

しかしこの話を聞いたアントニオは、露骨に嫌な顔をする。彼が言うには、ヌビア人たちは、そんな話は聞かないだろうし、もし聞いたとしても、笑うだけだろうと言う。あるいは場合によっては、冒瀆さえするかもしれない。アントニオはこのように警告するが、しかし夫人は引き下がらない。せめて本を読んで、そこから何か引き出すものがないかどうかだけでも確認してもらえないかと頼むのである。夫人の熱意に根負けし、ついにアントニオは彼女の願いを引き受ける。そして翌日の日曜日、ガスパラン夫妻の前で、アントニオはヌビア人の水夫に向かってお話を読むことになる。

アントニオが選んだのは「主人と奴隸」という話である。彼は水夫たちの前で、それを翻訳しながら語る。しかし最初の数語を聞いただけで、船長であるハサニンが猛烈に抗議の叫び声をあげる。彼によれば、奴隸など全く同情してやる必要のない人種だという。なぜなら奴隸は、預言者マホメットが死んだとき、他の者は、動物を含めて全て涙をこぼしたのにも関わらず、笑ったからなのだというのである。アントニオは、それに対して反論を試みるが、その反論は必ずしも旅行者たちの気に入るものではない。

「奴隸たちは笑った。それは確かだ。しかし彼らが笑ったのは、預言者の聖徳を知らなかったからなのだ。もし彼らが、マホメットがどれほど偉大な預言者であるかを知っていたならば、彼らは泣いたであろう。」 (t. I, p. 238)

旅行者たちは直ちに異議を申し立てる。

「彼らに言ってくれ！」夫が叫びます。「彼らに言ってくれ！奴隸だって特殊な人種ではなく、私やあなた方と同様に自由な人間の中から捕まえられ、売られているのだ。」 (Ibid.)

しかし船長はけだるそうに頭を振り、舌打ちをして不満の意を表す。明らかに、このようなキリスト教的な博愛の精神に基づいた理論では彼らを納得させることはできないのである。

そこでガスパラン伯爵は違った方向からのアプローチを試みる。今度はキリスト教とイスラム教に共通の伝統に訴えるのである。伯爵は通訳のアントニオに言う。「奴隷たちだって我らの父アダムの子であり、彼らも我らの兄弟なのだと彼らに言ってくれ！」(Ibid.) コーランの教えでは、アダムは「人類の父」とされており、キリスト教の伝統と全く同様、アダムから全ての人類が生まれたということになっている。今度のガスパラン伯爵の言葉は、少々水夫たちの同意を得られたかのようなのである。しかしまだ彼らの意見を覆すには到底足りない。

今度はアントニオが、先ほどの汚名を返上するために再び本を取る。彼はいかにして奴隷が、労役に苦しみながらも、心の平安を受けることができるかということの水夫たちに諄々と論ず。しかし無駄である。彼の話は水夫たちの興味をほとんど引かない。「水夫たちは他のことをしゃべっています。」(Ibid.)

とうとうガスパラン氏は、根本的に方法を改めることにする。彼は多かれ少なかれ抽象的な「理屈」による説明をあきらめ、水夫たちに自分自身の「経験」を想起させることによって、より身近なところから説得しようとするのである。彼は通訳に向かい、なぜ今日自分が、水夫たちを働かせていないのか、その理由を考えてみるよう伝えてくれるように頼む。それを西洋人旅行者の気まぐれと考えてはならない、と伯爵は続ける。それは神に従うためなのである。神は六日間働き、七日目は休むようにと命じているのである。このような言葉はついに水夫たちの心を動かしたかに見える。水夫たちは頷きながら、伯爵の言葉を聞いている。しかし旅行者の期待は、またしても裏切られることになる。水夫たちは、旅行者自身もその正当性を認めざるを得ないような反駁をするのである。

彼らは非常によく納得し、カウージャ（だんな）は正しいと答えます。しかし彼らはこれまでもたくさんのキリスト教徒を運んだが、このように振る舞う人は他に見たことがないとも答えます。(Ibid.)

今日宗教は、かつての価値を失ってしまっている。人々は今、何のやましさも覚えることなく、信仰が命じる掟を破っている。キリスト教徒自身がその信仰をないがしろにしているのであれば、どのようにしてイスラム教徒にキ

リスト教の価値を納得させることなどできるだろう。こうして、対話によって水夫たちを改宗させようとしたガスパラン夫妻の試みは、失敗に終わる。

気落ちしたガスパラン夫妻は、しばらくの間、ヌビア人の水夫に対して宗教談義をする意欲をなくす。その間も小舟は進み続け、旅の行程は確実に消化されていく。彼らの船旅が次第に終わりに近づくにつれ、夫妻は再び、水夫への布教の思いにとらわれる。とりわけ夫人は何とかもう一度試みを行い、本当に彼らの企ては不可能であるのか確認してみたいと願う。しかしこれまでと同じ方法を取っても、結果は同じはずである。彼女は、今までの彼らの活動を振り返ってみる。まず聖書を配ることでは、キリスト教の精神は伝わらなかった。また通訳を通じて語りかけても、ただ歯がゆさが残るだけである。やはり最後には、最も直接的な方法に頼るほか方法はない。すなわち旅行者自身が、現地の言葉を用いて、直接水夫たちに語りかけるのである。むろん流暢にアラビア語を話すことのできないガスパラン夫人にとって、それはたやすいことではない。しかし彼女は臆しはしない。必要な文句をあらかじめ通訳に訳してもらい、それを直接水夫にぶつけるのである。ガスパラン夫人の最後の試みである。

夫人は、アラビア語によるキリスト教の布教を施す相手を、水夫の中でも最も従順なアリという男に定める。アリは、非常に良く旅行者たちになついている。停泊地に着いて、他の水夫たちが旅行者から心づけをもらって町に繰り出していく際も、アリは常に忠実に旅行者に付き添っている。アリはガスパラン夫妻、とりわけガスパラン夫人の言うことなら何でも聞く。小舟が第二瀑布に着いた時、アリは近くに住んでいる許嫁に会いに行ってもよいかとおずおずと旅行者に伺いをたてる。夫妻からは快く許可が下りるのだが、それでもアリはまた内気そうに旅行者の方へ向かい、もしガスパラン夫人が望まないのであれば、自分は結婚しなくてもよいのだと告げるのである。夫人はできるだけ早く結婚式を上げるよう、大骨を折って説得しなければならなかった。彼女が、アラビア語によってキリスト教の神の偉大さを説こうとするのは、この従順なアリに対してなのである。

ガスパラン夫人は、アリが夫妻のお供をしているときを見計らって、言葉をかけることにする。言うべき文句は、すでに通訳から習って、練習済みである。「我々は神を侮辱した。神が私たちを最初に愛してくださった。神を愛さなければならない。神の慈愛だけが我々を救えるのだ！」(t. I, p. 275) 自分の母国語で発話されるこれらの言葉を聞いて、アリは一体どのような反応を見せるであろうか。納得してくれるだろうか、それとも憤慨するだろう

か。ガスパラン夫人の努力の全ては、アリの返答にかかっている。

私はアリがお供をしているときに、これらの言葉をまともにアリにぶつけます。アリは一瞬考え込むと、かなりまじめな様子でこう言うのです。「タイエブ、タイエブ（結構、結構）」。一体何だと言うのでしょうか。それはどういうことになるのでしょうか。（t. I, p. 275-276）

アリの素朴な返答は、ガスパラン夫人を当惑させる。夫人には、自分の意図がアリに通じているかどうかすら定かではない。確かにアリは船長ハサニンのように、イスラム教徒としての立場から、異教徒の言葉を言下に否定したりはしない。しかしだからといって彼は夫人の言葉に心を動かされ、夫人の勧めに従ってキリスト教に改宗しようという意志を見せるわけでもないのである。ただアリは、真剣に彼に語りかけてくる夫人の気持ちを傷つけないよう、毒にも薬にもならない曖昧な答えを返しただけのように見えるのである。

夫人は、自分の言葉に真っ向から答えてくれないアリの態度について、残念にもまた腹立たしくも思う。どんなに努力しても、彼女にはやはり言語の問題を乗り越えることはできないのであろうか。いやしかし、それはそもそも言語の問題なのであろうか。むしろそれは旅行者の信仰心が不十分であるからではないのだろうか。ガスパラン夫人は自分を責める。

もしアラビア語で自由に自分の考えを言い表せたなら、これらの魂の持ち主に忠実でいられるように思われます。しかしそれはおそらく幻想に過ぎないので。 「もし…だったら」というのは、「自分は…しない」という事実について心おだやかにしてくれるだけなのです。（t. I, p. 276）

こうしてガスパラン夫人の最後の試みも、結局何の成果もなく終わる。

ガスパラン夫妻のヌビアへの旅はこうして終わり、彼らは再びカイロへと戻ってくる。ナイル川の上での彼らの布教の試みは全くうまくいかなかった。彼らが配る聖書はほとんどの場合、単なる西洋人からの贈り物として受け取られてしまった。また彼らの意図がうまく伝わったと思われた例外的な人物は、実は彼らと同じキリスト教徒であることが後から分かった。さらに対話によって彼らの水夫たちにキリスト教の精神を理解させようという試みも、結局はうまく行かなかった。多くの努力と試行錯誤を重ねながらも、ガスパラン夫妻は結局旅行中、一人のイスラム教徒もキリスト教に改宗させることができなかったのである。

しかし最後の最後で夫妻は、ひとつの教訓をヌビア人の水夫たちから受け

取ることになる。そしてその教訓は、キリスト教の布教活動についての使命感に凝り固まった彼らに、全く新たな考え方を指し示すことになる。カイロに戻って来たガスパラン夫妻は、ヌビア人の水夫たちに別れを告げる。二ヶ月の間苦楽を共にした水夫たちと別れるのは、たとえ彼らが異教徒であれ、ほろりとさせるものがある。ヌビア人たちは船長ハサニンを先頭にして、旅行者たちに別れの挨拶をしに来る。夫妻は、それぞれの水夫に心付けを渡し、心付けを受け取った水夫は旅行者の手に接吻をして去る。最後にガスパラン伯爵が皆の前で、別れの演説を行う。

水夫たちは半円になって並び、私の夫は、彼らにいくつかのまじめな言葉を投げかけます。以下がその内容です。—— 私たちはもはやこの世で再び会うことはないだろう。次に出会うのは神の裁きの場の前であろう。私は、自分を救っていただくために、ただイエスさまのみを頼りにする。神が哀れんでくださらなければ、人は破滅してしまう。私たちはしばしば、あなた方のために祈った。これからも祈ろう。私たちは、あなた方に対し心から愛着を抱いている。

(t. II, p. 24-25)

このガスパラン伯爵の言葉を聞いたヌビア人の水夫の一人が、次のように答えるのである。「『モスレム、クリスチャン』アリが叫びます。『みんな同じ。アッラー！アッラー！ケリム！』」 (t. II, p. 25)

ガスパラン夫人はこの時、彼女がアラビア語で話しかけた時のアリの態度を思い出す。真剣に語りかけてくる西洋人女性に対し、アリはただまじめな様子で、「結構、結構」と短く答えるにとどめた。この時、アリは実は、宗教を超えた一種の人類愛を信じていた、と云えば、少々言い過ぎであろうか。いずれにせよアリは、信仰が違っていてもいつも親切にしてくれる旅行者に対し、常に変わらぬ忠実さと親愛の情を見せていた。つまり宗教が違って、人間は仲良くすることができるのである。むしろ宗教の違いにこだわるよりも、人間個人の友愛の精神の方が重要なのではないであろうか。アリの叫びの内容から導き出さうこのような考え方は、しかし熱烈なプロテスタントであるガスパラン夫人には当然受け入れがたいものである。だが同時に、それを完全に否定してさることもまた彼女にはできない。したがって、アリの叫びに対する夫人の感想は複雑である。「私たちが到達しようとしたのはそこではありませんでした。しかし意向はよいし、心根も真っ直ぐです。」 (Ibid.) いずれにせよ、旅行者たちは水夫たちから再び手に接吻を受け、よき友人として別れる。

終わりに

ガスパラン夫妻にとって、オリエント旅行は、キリスト教の教えを他者に伝えるという行為を改めて問い直す行為となる。スイスで、またフランスで、夫妻はプロテスタントの復権運動に深く関わりながら、様々な社会活動を行ってきた。特にパリ聖書協会に所属する夫人は、貧しい人々に聖書を配ることに心を砕いて来た。しかしそうした彼らの行為は本当に、信仰の本質的な部分に関わるものであったのだろうか。夫妻はオリエントで、キリスト教の教えを現地人に対して語ろうとしながら、様々な困難にぶつかる。彼らの意図はなかなか現地人に伝わらず、言語の問題はコミュニケーションを妨害し、彼らの行為は全く彼らが思ってもみなかった方向へと展開していく。夫妻がオリエントで繰り返す数々の失敗は、彼ら自身の信仰の強さに疑いを抱かせるほどである。

しかしその中でガスパラン夫妻は、現地人と生きた対話を持とうと努力し、オリエント人の真の考えを知ろうと様々に試行錯誤する。そのことによって夫妻は、西洋人に対する時よりも、相手に対してより強い人間としての興味を抱くことになる。こうした態度が、彼らの行為を真の意味で価値のあるものにしていないのだろうか。すなわちただ闇雲に、顔もよく知らぬ信者の数を増やそうとするのではなく、相手をまず対等の個人としてとらえ、その上で相手にキリスト教の愛を教えてあげたいと願って努力することこそが、真にキリスト教的な行為であると言えるのではないだろうか。この点では、ガスパラン夫妻は精一杯のことを行ったと言える。ヌビア人の水夫たちについて夫人は最後に語っている。

そうです、私たちが彼らに次に会うのは、主の前においてだけでしょ。確かにそこでもう一度会うことになるでしょう。どうかその時に、自分の知っている真実を自分たちだけのために隠していたなどと、彼らが私たちを非難することがありませんように。どうか我らが救い主が、その慈愛の中で、私たちの心の弱さという罪を消し去ってくださいますように。(Ibid.)

ガスパラン夫人のオリエント旅行はこうして、現地人との密接な、また人間的な関係の積み重ねの上に構築されることになる。このようなオリエント人に対する人間的な眼差しが確かに、『レヴァント紀行』を他の多くの旅行者の著作とは異なったものにしてしているのである。